

トマス・アキナスにおける 《verbum interius》の形而上学

津 崎 幸 子

I

「我々の精神 mens は、『身体的な（＝外的な）語り』 corporea locutio という域を超えて、崇高にして認識されえない『内奥的に語るという仕方』 modi locutionis intimae にまで高められてこそ、ふさわしい⁽¹⁾』という立場をとるトマスは、『神学大全』第1部107問1項主文の中で次のように述べている、「精神が能力態 habitus においてその有するところのことがらを現実的に観るべく ad actu considerandum これに自らを向ける convertere とき、そこには『自己自身に語る』ということが行なわれている。まことに『内なる言』“verbum interius” とよばれるところのものは、精神の懐抱するところとなったもの conceptus mentis それ自身にほかならない」とすなわち、「知性認識者 intelligens の場合にあっては、まさに知性認識のはたらき intelligere によって、何ものか aliquid が彼自身の内部において発出する procedere のである。この何ものか aliquid とは、つまり、知力 vis intellectiva に由来し、その知 notitia より発出するところの、『知性認識されている事物について懐抱される観念』 conceptio rei intellectae にほかならない。音声 vox が表示するところのものは、まさしくこういう観念 conceptio なのであって、それは、『語られる言』 verbum vocis によって表示される『心の言』“verbum cordis” と呼ばれるところのものである⁽²⁾。知性のうちにみいだされるこの「心の言」こそは、トマスが音声を伴う「外なる言』 verbum exterius と区別して「内なる言』“verbum interius” と呼んでいるところのものである。だが注意すべきは、かかる「内なる言」を、トマスは、「知性の言』“verbum intellectus” とか、「心の言』“verbum cordis”, 或いは「精神の言』“verbum mentis” とかよび⁽³⁾、更に「音声についての“imago”を有する言』としての「内なる言』から区別している⁽⁴⁾』ということである。かくて、トマスは『真理論』第4問

第1項主文の中で次のように述べている。「『音声についての imago を有する言』“verbum quod imaginem habet vocis”は神については、本来的な意味ではなく、ただ比喩的な意味で metaphorice のみ語られる。……だが、『心の言』“verbum cordis”は本来的な意味で proprie 神について語られる」と。

かくて、本論文で問題にしたい点は、かかる意味を有する我々人間の「内なる言」＝「心の言」＝「知性の言」が超越的な「神の言」verbum divinum といかなる仕方に関連しているかということである。だが、かかる課題の解明の手がかりとして、まずはじめに、「知性的はたらきの根源 principium operationis intellectualis である可知的形象 species intelligibilis は、知性のはたらき operatio intellectus によって形成されたもの formatum である『心の言』verbum cordis とは異なる」とトマスがいうかぎりにおける「知性のはたらき」operatio intellectus について考察しながら、「心の言」＝「知性の言」“verbum intellectus”の形成の出発点たる根源 principium の意味-構造を考えてみたいと思う。

II

トマスは『三位一体論-註解』第5問3項において次のように述べている。「知性のはたらき operatio には二様の仕方がある。一つは、『不可分なるもの』の覚知 intelligencia indivisibilium といわれるもので、それによってそれぞれの事物の何であるか de unaquaque re quid est (=unaquaque natura) が認識される。だが他の一つは、結合・分割する componere et dividere はたらきで、それによって否定的・肯定的な言表 enuntiatio negative vel affirmative を形成する」と。

ここに、我々は、「知性の言」が、「それぞれの事物の conceptio 乃至 ratio の形成」と「言表を形成すること」formare enuntiationem とに由来することを知る⁽⁷⁾。すなわち、人間の知性は、「最初の把握 prima apprehensio においていきなり事物 res の完全な認識 perfecta cognitio を得るわけではなく、先ず最初に事物そのものについて何ものか aliquid を、つまり知性の第一の固有の対象 primum et proprium objectum intellectus たる事物そのものの何たるか quidditas ipsius rei を把握し、つづいて、諸々の固有性 proprietates や付帯性 accidentia やまた事物の本質 rei essentia をめぐる諸々の関連 habitudines を把握するのである。そしてこのようなこ

とに関するかぎり、知性は把捉された一つのものを他のものと結合する *componere* とか、他のものから分つ *dividere* とかすることが必要となるのであり、さらにまた、一つの結合乃至分割から他のそれへと進むこと、すなわち推理する *ratiocinari* ことが必要となる。⁽⁸⁾「人間は、一から他へ *de uno ad aliud* と進むことによって可知的な真理 *veritas intelligibilis* の認識に到達するのであり、……人間が『理性的なるもの』 *rationales* と呼ばれる所以もここに存している。それゆえ……人間の推理 *ratiocinatio* ということも、探究乃至は『発見の途』 *via inquisitionis vel inventionis* にさいしては、或る『端的に認識されるもの』から *a quibusdam simpliciter intellectis*、即ち諸々の『第1基本命題 *prima principia*』から出発するのであるし、さらにまた、『判断の途』 *via iudicii* にあっても、分析 *resolvendo* ということを通じて諸々の第1基本命題に立ち帰り *redit ad prima principia* 発見されたところのもの *inventa* をこれに照らして *ad quae* 吟味する *examinare* のである。⁽⁹⁾」

これらのテキストから、「それぞれの事物の *conceptio* 乃至 *ratio* の形成」と「言表を形成すること」 *formare enuntiationem* との間の相違は、「発見の途」 *via inventionis* と「判断の途」 *via iudicii* との間の相違に対応し、推理 *ratiocinatio* の過程は、「発見の途」と「判断の途」の二重の認識過程においても存することが知られる。その限りにおいて、推理の過程は「知性の言」“*verbum intellectus*”の形成の全過程に関係していると考えられる。

すなわち、「発見の途」 *via inventionis* は、すでに認識された一つのことからから他の一つのことからへ進む理性の「推理」 *ratiocinatio* の過程に相応する。この過程の「……から」 *a quo* という終極 *terminus* は、その過程の可能性の条件として前提されるところの、「端的に知性認識されるもの」 *simpliciter intellecta* としての *prima principia* である。それに対して、「……へ」 *ad quem* という終極 *terminus* は、偶然的な個々のもの *singularia contingentia*、ゆえに発見 *inventio* がそれに向かって進むところの、「存在するもの」 *ens* の具体的な個別性 *singularitas* である。そのかぎりにおいて、「発見の途」は「それぞれの事物の *conceptio* 乃至 *ratio* の形成」、すなわち「定義を形成すること」 *formare definitionem* を意味し、経験の認識の過程である。それゆえに、或る一定の真理へ導く過程は、その前提を基礎づけているア・プリオリのうちに、まさに *prima principia* のア・プリオリのうちに有する。このア・

プリオリをトマスは次のような仕方**で**強調している。「人間の精神は、その推理を真理の或る端的な受容から始めるときのみ、一つのことがらから他のことがらへと進むことができる。いわゆるこの受容が、『根源の直知』である」“quia non posset mens humana ex uno in aliud discurrere, nisi eius discursus ab aliqua simplici *acceptio*ne veritatis inciperet, quae quidem *acceptio* est *intellectus principiorum*.”⁽¹⁰⁾

つまり、「人間には、それによって端的に・絶対独立的に・推理なしに真理の認識を成就するいかなる特殊な能力もない。だがかかる真理の受容は或る自然本性的な能力態によって自身のうちに内在している。これが『根源の直知』と呼ばれる」“Similiter nec in homine est una potentia specialis, per quam simpliciter et absolute et absque discursu cognitionem veritatis obtineat; sed talis veritatis *acceptio* inest sibi per quemdam habitum naturalem, qui dicitur *intellectus principiorum*.”⁽¹¹⁾

それゆえに、「発見の途」via inventionis の過程は、それを十全に基礎づけているア・プリオリの次元に、すなわち「……から」a quo という「究極の終極」ultimus terminus として「根源の直知」intellectus principiorum の次元に基礎をおいている。要するに、この過程は「根源の直知」から、「結合」compositio を実現するために、推理的な仕方ではじめて「偶然的な個々のもの」singularia contingentia の領域に下ってゆくことができる。いずれにせよ、その発見 inventio が「多くの場合」ut in pluribus 「真なるもの」verum を推理しうるといことは、この結合的過程の本質に属している。然るに推理の過程にはいかなる必然性も存しない。なぜならば、「発見」inventio から必ずしも結果として「確実性」certitudo が生ずるとは限らないからである。⁽¹²⁾

かくして、「発見の途」は「判断の途」via iudicii を必要とする。二つの認識過程は二つの切り離された方法として互いに対立しているものではなく、二つが互いに制限し合う瞬間に一つの認識が完成するのである。「根源の直知」から「偶然的な個々のもの」の質料的なものへ下降してゆく「発見の途」は「発見されたところのもの」inventio をそれに照らして ad quae 吟味すべく、「根源の直知」への立ち帰り reditio としての向きかえ conversio を必要とする。トマスはこの過程を次のような仕方**で**特性づけている。「推理によって発見されるところのものを、理性がそれにおいて分析する prima principia に照らして吟味しない場合、理性の推理はいかな

る確実なものにも達しないであろう」“nec rationis discursus ad aliquid certum perveniret, nisi fieret examinatio eius quod per discursum invenitur, *ad* principia prima, in quae ratio ⁽¹³⁾ *resolvit*.” かくて “*resolutio*” 分析・解明とは、対象性の根源への「立ち帰り」*reditio* において卓越したありかたで *eminentiori modo* 基礎づけの任務を果たすところの「判断の途」を意味する。「判断の途」の必然性 *necessitas* は知性そのものの構造に基づく。だが「知性が誤りなく事物と合致しうるのは偶然的なものにおいてではなく、ただ必然的なものにおいてのみである」⁽¹⁴⁾。それゆえ、「論証にさいして知性に自体的に知られる或る根源においての還元を必要とするとともに、またそれぞれの個々のものが何であるかの探究においても還元を必要とする。さもなければいずれの場合においても無限遡行となり、学知や事物の認識は全く消滅するであろう」“quod sicut in demonstrabilibus oportet fieri reductionem in aliqua *principia per se* intellectui *nota*, ita investigando *quid est unumquodque*; alias utro- ⁽¹⁵⁾ bique in infinitum iretur, et sic periret omni no scientia et cognitio rerum.” 言いかえると、知性は不可謬的に偶然的事物と合致することはできない “non potest infallibiliter conformari in rebus contingentibus” ことより、いかなる必然性も有していない “non tamen necessitatem habens” ところの端的な所与の経験的なものは、*prima principia* のア・プリオリの地平への「還元・立ち帰り」*reductio* を経験する場合のみ、「必然性・確実性」の意味での真理は得られる。なぜならば、必然性と確実性は、絶対無条件的には知性のこの *prima principia* への「向きかえ」*conversio* においてのみ存し、「そこから」*a quo*, また、「それに基づいて」*ex quo* のみ、「発見の途」は「判断の途」を通じて真理に到るからである。

ところで、トマスは、この「知性に自体的に知られる諸々の根源」*principia per se intellectui nota* を存在-概念、すなわち「有」“ens” によって代表させている。なぜならば、それぞれの他の認識はこの知の根源 *scientiae principium* のうちに存在しているからである。トマスはいう、「最初から知性は**いわば**最もよく知られているものを懐抱していて、すべての観念をそれにおいて分析するところのものは、**有**である」“*Illud autem quod primo intellectus concipit quasi* notissimum, et in quo omnes conceptiones ⁽¹⁶⁾ *resolvit*, est ens.” と。ここで注目に値することは、トマスが “*quasi* notissimum” という非常にニュアンスのある表現を用いているということ

ある。つまり、第一の「可知的なもの」*intelligibilia* は、一方では最もよく知られているものである。なぜならばそれ以上の明白な概念によってそれを証明することはできないから。だが、他方ではそれは最もよく知られていないものでもある。なぜならばそれがあらゆる知の対象を包含して、その豊富さは決して論じつくしえないからである。⁽¹⁷⁾

かくして、「知性の言」が「発見の途」と「判断の途」の二重の認識過程を経て「形成されたもの」*formatum* であるかぎりにおいて、この「根源」*principium* の地平は、まさに「知性の言」の「種子」*semina* である。トマスはいう、「我々のうちには或る種の「知の種子」*scientiarum semina* が先在する。即ち、能動知性の光 *lumen intellectus agentis* でもって可感的なものから抽象された形象 *species a sensibilibus abstractas* によって直ちに認識されるところの知性の第一の懐抱 *primae conceptiones (=ens)* がそれであり、それらは公理 *dignitas* のごとく「結合されたもの」*complexa* であっても、「有」の特質 *ratio entis* や「一」の特質や、かかるもののごとく「非結合的なもの」*incomplexa* であってもよく、それらを知性は直ちに把握する。これらの普遍的な根源 *principia universalia* からあらゆる *principia (=secunda principia)* が、丁度或る種の種子的ロゴス *rationes seminales* から由来するごとくに、帰結する⁽¹⁸⁾。この根源の地平は、第一の公理的な *principia* にも同様に諸々の超越的なものや諸々のカテゴリーにまでも及び、この根源の地平のうちに、「全知」*tota scientia* は潜在的な仕方⁽¹⁹⁾で *virtualiter* 含まれている。この「知の種子」*semina scientiae* の潜勢力からのみ、「存在するもの」“ens”は具体的な「真なるもの」*verum* へ形成されるのであり、またかかる「知の種子」への還元 *reductio* においてのみ、帰結 *conclusio* の真理は確実性と必然性とを得る。かくて「知性の言」が、それに基づく根源 *principium ex quo* としての「根源の直知」*intellectus principiorum=ens*こそは、事物 *res* が「真なるもの」*verum* として把握されるかぎり、事物の原因 *causa rei* である。

けだし、「いかなる人間のうちにも『能動知性の光』*lumen intellectus agentis* という『知識の或る意味での根源』*quaedam principium scientiae* が内在しているのであって、かかる光によってあらゆる知識の或る若干の『普遍的な根源』*universalia principia (=principium cognoscendi=種子的ロゴス)* が最初から直ちに、自然本性

的な仕方 naturaliter において認識される。⁽²⁰⁾」

かかる意味において、我々は、次に、「知性の言」の種子的ロゴスの根源ともいうべき、「能動知性の光」lumen intellectus agentis への直接的立ち帰りにおいて、「知性の言」がそれに基づく根源 principium ex quo としての「根源の直知」intellectus principium 乃至 prima principia の自然本性的能力態の意味を考えてみたいと思う。

III

トマスによると、「知性的光」lumen intellectuale とは、それを機能的にみると、可知性の根拠、源泉である。「知性に属するものたるかぎりにおいて、光とは真理の顕示といったものにほかならない」「*lumen, secundum quod ad intellectum pertinet, nihil est aliud quam quaedam manifestatio veritatis.*」この純粋な哲学的見解を、トマスは『神学大全』第1部106問1項主文において、使徒パウロの聖書の言葉、「顕示されるものはすべて光である」「*omne quod manifestatur, lumen est.*」(『エペソ人への書翰』第5章13節)という信仰者の見解と直接に結びつけている。この場合、哲学的見解が信仰者の見解でもって獲得されるのか、またこれを規範としてまねいているのか、或いは前述の哲学的見解を裏付けるためののみ、信仰者の見解が引用されているのか、決定することは難しい。

なかんずく、「知性的光」が真理を顕示 manifestatio し、かつ一般に顕示しうるということは、結局、その超越性のうちに根拠をおいている。なぜならば、「知性の光」は第1真理 prima veritas の刻印づけ impressio によるものであるから。すなわち、「我々の知性の光 lumen intellectus そのものは自然本性的 naturale なものなるにせよ、無償によるもの gratuitum なるにせよ、いずれも第一真理の刻印づけ impressio にほかならないものである。⁽²¹⁾」

形式的にみると、内在的な知性的光は、超越的な「創造されざる光」lumen increatum の一種の模像的な類似性 similitudo である。この模像的な類似性とは、それによって“*imago*”が現象に現われ、かつ原像(範型) *exemplar* を模倣していることを意味する。すなわち、「すべての被造物は、或る第一能動者 prima agens, 即ち神の或る種の似像 *imagines Dei* である。なぜならば、能動者は自己に似たものに動かすからである。だが似像の完全性 perfectio imaginis は、自己の範型(=原像)

exemplar をそれ自身への類似性によって *per similitudinem ad ipsum* 表現するとき存する。つまり類似性に即して“*imago*”は構成される。⁽²²⁾「我々のうちに存する知性的光 *lumen intellectuale* そのものも永遠の根拠 *ratio aeternae* がそのうちに含まれているところの創造されざる光 *lumen increatum* の一種の分有された類似性 *similitudo* にほかならない。」この論述は、また聖書の言葉、「我々に善を示すのは誰か?……神の御顔の光は我らの上に印されてある」「*Quis ostendit nobis bona?—Signatum est super nos lumen vultus tui.*」(『詩篇』第4章6節)に結びつけられている。

かかる意味において、まず、我々は、「知性的光」*lumen intellectuale* の可知性の根拠・源泉を、「*imago* を照らす」-根拠の指摘によって考察したい。

「能動知性の光」*lumen intellectus agentis* は、事物のすべての規定根拠 *rationes* をそのうちに含んでいるところの原型的-創造されざる光 *lumen increatum* と、規定根拠を表現しようと志向する *intendere* 我々人間の模像的-「内なる言」“*verbum interius*”との間を媒介するものである。それゆえに、「能動知性の光」は二様の方向、すなわち、「超越性」と「内在性」とを指示している。ここに本論文の課題たる我々人間の「内なる言」と超越的な「神の言」との関係を解明する原点も存すると考えられる。だがまずはじめに、「能動知性の光」の「内在性」*immanentia* の方向においてトマスの論議を追及しよう。

知性認識の力は能動知性の光の強さと共に強化される。「知性の光が強ければ強いほどますます内奥(=根源 *principium*)に浸透することができるということを明らかにしなければならぬ。」「*manifestum est quod quanto lumen intellectus est fortius, tanto potest magis ad intima penetrare.*」⁽²⁴⁾

あらゆる学知 *scientia* は、「*imago* を照らす」-根拠のア・プリオリのうちに始源的に与えられている。トマスはいう、「能動知性の光において、或る意味で、あらゆる学知 *scientia* は原初的な仕方では *originaliter* 我々に賦与されている *indita* のである。すなわち、それは、能動知性の光でもって直ちに認識されるところの普遍的な懐抱 *universalis conceptio* (=⁽²⁵⁾種子的ロゴス *ratio seminalis*) を媒介とすることによる。」⁽²⁶⁾

「*imago* を照らす」-根拠たる「能動知性の光」は可知的形象の種の本性 *natura*

speciei と共に、内在的認識の根源 principium cognoscendi である。すなわち、『知性認識する者』intelligens において、知性のはたらきの根源 principium intellectus operationis として二通りのものが存在している。一つは、即ち知性的のちから *virtus intellectualis* そのものであり、これは『可能態における知性認識する者』において見いだされるごとき根源（＝主体的）である。これに対して、いま一つは、現実態における in actu 知性認識というはたらきの根源 principium intelligendi（＝客体的）であって、これは即ち、『知性認識する者』のうちにおける『知性認識されるものの類似性』similitudo rei intellectae にほかならない。⁽²⁷⁾しかしながら、『知性的光』lumen intellectuale は、これに『知性認識される事物の類似性 similitudo』（＝可知的形象 species intelligibilis）を併せれば、知性認識というはたらきの完全的な根源 sufficiens principium であるにしても、それは然し第二次的根源 secundarium principium、つまり第一次の根源 primum principium（即ち神）に依存せる根源でしかない。⁽²⁸⁾」

このような二つの根源、すなわち主体的な知性的光 lumen intellectuale と客体的な可知的形象 species intelligibilis とによって、「知の能力態」habitus scientiae 乃至「根源の直知」intellectus principiorum（＝ens）は得られる。それでも知性的光が根源的・一次的能動者 agens principale et primum であり、可知的形象は、それに対して、素材的・原因の意味において用具的・二次的能動者 agens instrumentale et secundarium である。というのは、知性的光が「可知的形象」を基礎づけるからである。すなわち、「知性においては能動的知性の光がいわば第一次の能動者 primum agens である。つまり、『動かすもの』movens が『動かされるもの』motum に対するとく、可知的形象は、能動知性の光によって現実的に actu なる。またそれゆえに、知性的部分に属する能力態 habitus も、光 lumen と形象によって認識されるどころの可知的形象 species intelligibilis とに基づいて形成される。⁽²⁹⁾」

かくして、能動知性の光は、prima principia の能力態的知 scientia habitualis と同一のものではない。むしろかかる知 scientia の主要な原因 principalis causa である。なぜならば、感性的に与えられているものは、それ自身において「可知的なもの」intelligibilis ではなく、それを「可知的なもの」になすのは能動知性であるからである。言いかえると、この prima principia は抽象 abstractio の結果であるか

ぎり、その原因ではありえないからである。しかしたとえ、トマスが能動知性の *prima principia* との単的な同一化を認めていないとはいえ、我々の知性は経験に与えられているものを「可知的なもの」になすために、この *prima principia* を用いることを認めている。「*principia* は能動知性に対して能動知性の或る種の用具としての関係にある。なぜなら能動知性は *principia* を通して他のものを現実的に可知的なものとするのであるから。」“... *principia comparantur ad intellectum agentem ut instrumenta quaedam eius, quia per ea, facit alia intelligibilia actu.*”⁽³⁰⁾ 結局、*prima principia* としての能力態的知 *habitualis scientia* は能動知性の用具 *instrumenta* である。

かかる意味において、「知性の言」は主動因 *causa principalis* としての「能動知性の光」と用具因 *causa instrumentalis* としての「根源の直知」*intellectus principiorum* 乃至 *prima principia* によって形成されたものであり、「知性の言」がそれに基づく根源 *principium ex quo* としての「根源の直知」乃至 *prima principia* の能力態的知そのもののうちに知性的光は含まれている。つまり、「知性認識されるところのものはすべて、知性的な光のちから *vis intellectualis luminis* に基づいて認識されるのであるから、認識されたそのものは、認識されたものたる限りにおいて、自己のうちに分有されてあるものとして知性的な光の力によって知性を強化する *confortare* ことを得るのである。⁽³¹⁾」それゆえに、「根源の直知」乃至 *prima principia* のうちに分有されている「能動知性の光」は、「知性の言」の形成の過程において決して主要な能動者としてはたらくわけではなく、却って主要な能動者たる内的な根源 *principium interius* (= 発見・判断) を援助するもの *coadiuvans* としてはたらくのであり、つまりこれを強化し *confortare* またその結果 *effectum* を産出するのに役立つべき用具とか援助を供するという仕方でもって⁽³²⁾はたらくのである。かくして「知性の言」がそれに基づく根源 *principium ex quo* としての「知の根源」のうちに「全知 *scientia tota* は潜在的な仕方⁽³²⁾で *virtualiter* 含まれている」という意味もここにおいてはじめて明らかになるであろう。

ところで、「知性の言」がそれに基づく根源 *principium ex quo* としての「根源の直知」*intellectus principiorum=ens* 乃至 *prima principia* としての能力態的知 *scientia habitualis* は、一方では、すべての「還元」*reductio*・「立ち帰り」*reditio* 一般の

可能性の条件であり、他方では、意識そのものの乃至意識のうちに明示される主体性の本質的構造 *dispositio* である。つまりそれなしには、いかなる意識も、立ち帰りも、主体性も存しないであろう。「向きかえ」*conversio* は、能力態的に *habitualiter*、乃至はアウグスティヌスの言葉でいえば、「記憶のかたちにおいて」*secundum memoriam*、すでに知性のうちにあるところのことがらを、現実態 *actus* において観られているもの *consideratum* になすということにおいてのみ存する。⁽³³⁾ ここにおいて、はじめて、我々は、本論文の冒頭の方で引用した『神学大全』第1部107問1項主文の中での、「精神の能力態において *in habitu* その有するところのことがらを現実的に観るべく *ad actu considerandum* これに自らを向ける *convertere* とき、そこには『自己自身に語る』ということが行われている。まことに『内なる言』*verbum interius* とよばれるところのものは、精神の懐抱するところとなったもの *conceptus mentis* それ自身にほかならない」という言葉の意味も明らかに理解することができる。

以上において、我々は、「知性の言」の形成の第一能動者としての能動知性の光を模像的-「内在性」の方向において考察してきたのであるが、次に能動知性の光を原像的-「超越性」の方向において考察しつつ、我々人間の「内なる言」と超越的-「神の言」*verbum divinum* との関連を明らかにしたいと思う。

IV

トマスは思考する精神のうちに神的な真理の光の照射をみている。すなわち、「いかなる精神も神的な光の或るものを分有していないならば、全く闇である。——なぜならば、認識される真理はいかなるものであれ、全て、闇において輝く、かの光の分有に基づいているからである。」“*nulla (mens) tamen adeo tenebrosa est, quin aliquid lucis divinae participet.—Quia quidquid veritatis, a quocumque cognoscitur, totum est ex participatione istius lucis, quae in tenebris lucet.*”⁽³⁴⁾

真理をいたるところに探し求めようとするトマスのエートスは、各真理が誤りにとらわれていようとも、その超越的由来によって本質的に根源の真理に結びつけられているのだという認識に基礎をおいている。すなわち、トマスはいう。「精神の懐抱するところとなっていることがらは二通りの根源に関係させて考えられること

ができる。一つの根源 principium はすなわち第一真理 prima veritas たる「神」であり、いま一つは我々がそれによってことがらを現実的に観る actu considerare にいたるところのものたる『知性認識者の意志』 voluntas intelligentis にほかならない。真理は、然るに、知性の光であり、そしてあらゆる真理の準則 regula は神そのものにほかならないのであってみれば、精神に懐抱されていることがら(=「内なる言」)の顕示 manifestatio は、ことがらが第一真理に依存するものなるかぎり、語りであるとともにまた照らし locutio et illuminatio でもある」と。⁽³⁵⁾

我々の知性的光の源泉は神であり、神が本質的光である。「理性的被造物のうちにあるところの光のすべては、超越的光そのものから導き出される」“quidquid luminis est in rationali creatura, totum derivatur ab ipsa suprema luce.”⁽³⁶⁾「光り輝く 存在は神の固有性である。それに反して、その他のものは光を受けているもの、すなわち光を分有しているものである。だが神は本質的に光である”*esse enim lucem est proprium Dei, alia vero sunt lucentia, idest participantia lucem; sed Deus est lux per essentiam.*”⁽³⁷⁾

トマスの秩序論によると、存在論的に下位なるものはすべて、存在論的に上位なるものの中にあり、最終的には最高なるものの中に含まれていて、この最高なるものによってのみ存在 *esse* する。

世界に内在するすべての光がそれによって輝くところの「原像的な光」は「神の言」 *verbum divinum* である。すなわち、「分有によって存在するところのあらゆるものは、かかる本質によって存在しているところのものから導き出される。…それゆえ御言は自己の本性によって真の光であるから、あらゆる輝くものはそれ自身(御言)によって輝くべきである”*Omne enim quod est per participationem, derivatur ab eo quod est per essentiam tale...Quia ergo Verbum est lux vera per suam naturam, oportet quod omne lucens luceat per ipsum.*”⁽³⁸⁾

「神の御言」 *Verbum divinum* は諸々の内在的な形相-根拠を通して存在するすべてのものを「照らし出す」。言いかえると、「自然本性的な秩序に従って *secundum naturalem ordinem* 感覚から受けとられたものであるにせよ、表象力 *imaginatio* のうちに神によって *divinitus* 形成されたものであるにせよ、人間のうちに存在する可知的な光 *lumen intelligibile* が強力であればあるほど、表象像からいっそう卓れ

た excellentior 知的認識が得られる。それゆえ啓示 *revelatio* を通して神の光が注がれることによって、表象像からいっそう豊かな認識が得られる。」⁽³⁹⁾ かかる意味において、「それぞれのものはたとえ自己の形相によって *per suam formam* 顕示され、認識されるといっても、すべての形相は御言によって存在し、御言は理性的な生命あるものの完全なわざ *ars* である。⁽⁴⁰⁾ それゆえに、御言はただ自己において光であるのみならず、あらゆるものを顕示する光でもある。」⁽⁴¹⁾ 「かくて（最高の光）があらゆるものを現実的に可知的なものになす、そのかぎりにおいて、認識される事物 *res* がそれによって所有するところのあらゆる形相 *forma* は、それ自身（光 *lux*）から導き出される。」⁽⁴²⁾

知性の光に関するトマスの次の論述が存在 *esse* の超越的根拠を指し示している。「*imago* を照らす」根拠が認識の力を構成している。つまり、「精神のうちに注入された神的な光は、自然本性的な光であり、それを通して知性的力は構成される」“*lux influxa divinitus in mentem est lux naturalis, per quam constituitur vis intellectiva.*”⁽⁴³⁾

トマスにとって人間の精神-アニマ *anima* は一種の知性的実体 *substantia intellectualis* である。⁽⁴⁴⁾ それゆえ、精神-アニマそのものが、一方では、はたらきの根源として、その「立ち帰り」*reflexio* 以前の意識総合であり、他方では、「立ち帰り」以前の意識の源泉である。つまり、「能動知性は……人間のアニマの或るものである。」⁽⁴⁵⁾ 「人間のアニマ、その光 *lumen* が能動知性である。」⁽⁴⁶⁾ 知性の自然本性的な光をうけとるのはアニマであり、知性の自然本性的な光を通してはじめて設定 *constituere* されるところの、能動知性そのものではない。身体の形相 *forma corporis* としてのアニマは、身体への、ひいては世界への秩序づけを得るために、知性の自然本性的な光をうけとる。すなわち、「アニマは、その知性的認識が身体への秩序づけを有するがごときありかたにおいて知性的光をうけとる。」“*anima recipit intellectuale lumen hoc modo ut eius intellectiva cognitio habet ordinem ad corpus.*”⁽⁴⁷⁾

このことからさらに、知性の自然本性的な光の⁽⁴⁷⁾ ア・ポステリオリな現象的「表象像」*phantasmata* (=「音声についての“*imago*”を有する言)への自然本性的な「向きかえ」*conversio*=「志向」*intentio* も明らかになる。すなわち、「アニマはいわば身体の自然本性的な形相として身体に結びつけられていることにより、アニマの自然本性的な関連 *naturalis habitudo* は『表象像』*phantasma* への『向きかえ』*conversio* によ

って知性認識するところのものに適合する ⁽⁴⁸⁾convenire。」

アニマのうちで、「*imago* を照らす」-根拠としての能動知性の光はすべての可能態における「可知的なるもの」すなわち「表象像」を照らす。

では、アニマは知性の自然本性的な光をいかなる仕方でも受けとるのか。この「知性の光」は受動的な「形相」-根拠たる「アニマ」に対していかなる関係にあるか。——アニマそのものが“*imago*”を-規定する身体の「形相の輝く」⁽⁴⁹⁾-根拠である。かかるものとしてアニマは知性の自然本性的な光を偶然的な仕方でも受けとるのではない。つまり「偶然的なもの」の本性は十全に構成された実体、すなわちこの場合、身体とアニマの「合一」*unio*を前提にする。トマスによると根源的な根拠が或るもの *aliquid* をその「現実態」*actus* として受けとる。それゆえ知性の自然本性的な光が結局のところ現実態 *actus*-「現実性」*actualitas* であり、それが個別的-可能的な形相-根拠たる「アニマ」を現実態になる。そこで可能的な「形相・本質」-根拠の領域において、「存在するもの」*ens* の「現実態」乃至「現実性」*actualitas* とは「存在」“*esse*”である。⁽⁵⁰⁾すなわち、「或る種の現実態を存在とよぶ」“*esse actum quendam nominat.*”「だが存在は現実態である」“*esse autem actus est.*”⁽⁵¹⁾「存在そのものは本質の或る種の現実性である」“*ipsum esse est actualitas quaedam essentiae.*”⁽⁵²⁾「存在は……それぞれの実体の現実性である」“*esse est……actualitas cuiuslibet substantiae.*”⁽⁵³⁾「存在はあらゆる形相乃至本性にとっての現実性である。」“*esse est actualitas omnis formae vel naturae.*”⁽⁵⁴⁾「存在はあらゆる事物の現実性である」“*esse est actualitas omnis rei.*”⁽⁵⁵⁾「存在は実体乃至本質にとっての現実性である」“*esse est actualitas substantiae vel essentiae.*”⁽⁵⁶⁾「存在はあらゆる現実態にとっての現実性であり、このことによってあらゆる完全性にとっての完全性である。」“*esse est actualitas omnium actum et propter hoc est perfectio omnium perfectionum.*”⁽⁵⁷⁾

では、「知性的光」が実際アニマの「現実性」*actualitas* (*esse*) といえるであろうか。——もしそうであるとすれば。この「知性的光」は同時に「存在の輝く」-根拠でもありうるだろう。事実、トマスはアリストテレス的三段論法の形式を用いて、「現実性」(「存在」)と「照らす認識-根源」との同一性を論結している。「或るもの *aliquid* がそれを通じて *per quod* (=認識の根源) 認識されるところのものは、類似性 *similitudo* によって光 *lumen* とよぶことができる。だがアリストテレスは『形而上学』第9

巻において、およそいかなるものも現実態においてあるところのものを通して *per id quod est in actu* 認識されるのだということを証明している。だからして、事物の現実性そのもの *ipsa actualitas rei* はそれ自身に属する或る種の光 *quoddam lumen* ⁽⁵⁸⁾である。」

それゆえに、「存在」esse は知性的光において輝く。いまや、「輝く存在」はそのうちに隠されている「或るもの」aliquid, 即ちその形象性を現実に明るくする。すなわちそれは形成される。それが形成されることにより、それは志向的になる。すなわち或る一定の意味方向において「存在」の意味を開示する。「輝く存在」はあらゆる対象-目的を含むペルソナにおいて超越的な「一なるもの」unum transcendente を形成する。そこからさらに知性の形相的对象たる超越的な「真なるもの」verum transcendente は形成される。「真理」はなにかなく「存在」esse に基礎をおいている。「真理 veritas は何性 quidditas そのものうちよりもむしろ事物の存在 esse rei のうちに基礎づけられている。……事物の存在そのものは, 知性の認識のうち存在するかぎりにおいて真理の原因⁽⁵⁹⁾である。」

「輝く存在」は超越的な「真なるもの」において、結局、超越的な「善なるもの」bonum transcendente へひきつづき形成される。このことはむろん自由なる意図 *intentio* を通しての精神的高まり-努力の領域においてはじめて展開⁽⁶⁰⁾される。

最終的に、「輝く存在」は「真なるもの」と「善なるもの」との統一においてそれらのあらゆる対象の調和、すなわち超越的な「美なるもの」pulchrum transcendente ⁽⁶¹⁾を形成する。これでもって、存在の形成の意味は完成する。言いかえると「内なる言」“verbum interius”の形成は完成する。要するに、トマスにとって、「内なる言」の形成は、「存在するもの」ens, 間接的には「存在」esse の把握-*intentio* にあるといえよう。そして「内奥的に語る」ということも、結局のところ、最も根源的な「輝く存在」に己れの精神を「向ける」*convertere* ということにあると考えられる。

註

(1) Thomas Aquinas: *Summa Theologiae*, I, q. 107, a. 1, c.

(2) *Ibid.*, I, q. 27, a. 1, c.

- (3) 本稿では差し支えない限り一貫して「知性の言」とした。
- (4) この点に関しては別稿で詳述したので本稿では省略した。また「内なる言」一般の序文的説明も別稿にゆずる。
- (5) *Quaestiones Quodlibetales* V, q. 5, a. 9, c. species intelligibilis, quae est principium operationis intellectualis, differat a verbo cordis, quod est per operationem intellectus formatum.
- (6) *S. T.*, I, 1. 85, a. 8, c. ... indivisibile tripliciter... *uno modo*, sicut continuum est indivisibile, quia est indivisum in actu, licet sit divisibile in potentia... *Alio modo* dicitur indivisibile secundum speciem, sicut ratio hominis est quoddam indivisibile... *Tertio modo* dicitur indivisibile quod est omnino indivisibile, ut punctus et unitas, quae nec actu nec potentia dividuntur. 参照。
- (7) Irmgard Habel, *Die Sachverhaltsproblematik in der Phänomenologie und bei Thomas von Aquin*, Regensburg 1960, S. 121 参照。
- (8) *S. T.*, I. q. 85, a. 5, c. (9) *Ibid.*, I. q. 79, a. 8, c.
- (10), (11) *De Veritate*, q. 15, a. 1, c.
- (12) *In Posteriorum Analyticorum*; L. 1, c. 1, n. 8. si scientia acquiri non posset per syllogismum vel argumentum, nulla esset necessitas demonstrativi syllogismi. 参照。
- (13) *De Veri.*, q. 15, a. 1, c. (14) *S. T.*, I-II, q. 57, a. 5, ad 3.
- (15) *De Veri.*, q. 1, a. 1, c. (16) *De Veri.*, q. 1, a. 1, c.
- (17) Gerard Verbeke; Gewissheit und Ungewissheit philosophischen Denkens nach Thomas von Aquin (in: *Thomas von Aquin im philosophischen Gespräch*) München 1975, S. 80 note 参照。
- (18) *De Veri.*, q. 11, a. 1, c. Praeexistunt in nobis quaedam *scientiarum semina*, scilicet primae conceptiones intellectus, quae statim lumine intellectus agentis cognoscuntur per species a sensibilibus abstractas, sive sint complexa, ut dignitates, sive incomplexa, sicut ratio entis, et unius, et huiusmodi, quae statim intellectus apprehendit. Ex istis autem principiis universalibus omnia principia sequuntur, sicut ex quibusdam *rationibus seminalibus*.
- (19) *S. T.*, I-II, q. 3, a. 6, c. in principiis scientiae virtualiter tota scientia continetur.
- (20) *S. T.*, I. q. 117, a. 1, c.
- (21) *S. T.*, I, q. 88, a. 3, ad 1. *De Veri.*, q. 11, a. 1, c. 参照。
- (22) *Summa Contra Gentiles*: L. 3, c. 19, n. 2007. Res omnes creatae sunt quaedam *imagines* primi agentis, scilicet Dei: agens enim agit sibi simile. Perfectio

autem imaginis est ut repraesentat suum exemplar *per similitudinem* ad ipsum: ad hoc enim imago constituitur.

- (23) *S. T.*, I, q. 84, a. 5, c. lumen intellectuale, quod in nobis est, nihil est aliud quam quaedam participata *similitudo* luminis increati, in quo continentur rationes aeternae.
- (24) *Ibid.*, II-II, q. 8, a. 1, c.
- (25) *De Veri.*, q. 11, q. 1, ad 5. quod in eo qui docetur, scientia praeexistebat, non quidem in actu completo, sed quasi *in rationibus seminalibus*, secundum quod *universales conceptiones*, quarum cognitio est nobis naturaliter insita, sunt quasi *semina* quaedam omnium sequentium cognitorum. 参照。
- (26) *De Veri.*, q. 10, a. 6, c. Et sic etiam in lumine intellectus agentis nobis est quodammodo omnis scientia originaliter indita, mediantibus universalibus conceptionibus, quae statim lumine intellectus agentis cognoscuntur.
- (27) *S. T.*, I, q. 105, a. 3, c. (28) *Ibid.*, I, q. 105, a. 3, ad 2.
- (29) *In Sententiarum III*, d. 14, q. 1, a. 1, II.
- (30) *De Veri.*, q. 9, a. 1, ad 2 及び *De ani.*, a. 5, c. 参照。
- (31) *De Veri.*, q. 9, a. 1, ad 2.
- (32) *S. T.*, I, q. 117, a. 1, c. 参照。テキストでは「わざ」*ars* となっているが、「知性の光」と同一視してもさしつかえないと思うので、このようにした。
- (33) *S. T.*, I, q. 107, a. 1, c. (34) *In C. Jo.*, c. 1, L. 3, n. 103.
- (35) *S. T.*, I, q. 107, a. 2, c. (36) *In C. Jo.*, c. 8, L. 2, n. 1142.
- (37) *Ibid.*, c. 12, L. 8, n. 1713. (38) *Ibid.*, c. 1, L. 5, n. 127.
- (39) *S. T.* I, q. 12, a. 13, ad 2. ex phantasmatis, vel a sensu acceptis secundum naturalem, ordinem, vel divinitus in imaginatione formati, tanto excellentior cognitio intellectualis habetur, quanto lumen intelligibile in homine fortius fuerit. Et sic per revelationem ex phantasmatis plenior cognitio accipitur, ex infusione divini luminis.
- (40) この場合の *ars* は註 (32) においてあげたテキストにおける *ars* の意味を有するものと考えられる。すなわち, *S. T.*, I, q. 117, a. 1, c. Primo quidem, quod *ars* imitatur naturam in sua operatione: sicut enim natura sanat infirmum alterando, digerendo, et expellendo materiam quae causat morbum, ita et *ars*. Secundo attendendum est, quod *principium exterius*, scilicet *ars*, non operatur sicut principale agens, sed sicut coadiuvans agens principale, quod est *principium interius*, confortando ipsum, et ministrando ei instrumenta et auxilia, quibus utatur ad effectum producendum: sicut medicus confortat naturam, et adhibet ei cibos et medicinas, quibus natura utatur ad finem intentum. ここ

にトマスが神を「わざ-働きにおける言」においてみるヘブライ思想の伝統に従っていることを知ることができる。

- (41) *In C. Jo.*, c. 1, L. 4, n. 118. Cum enim unumquodque manifestatur per suam formam et cognoscatur, omnes autem formae sint per Verbum, quod est *ars* rationum viventium: est ergo lumen, non solum in se, sed omnia manifestans.
- (42) *Ibid.*, c. 8, L. 2, n. 1142. Item facit (lux suprema) res omnes actu intelligibiles, inquantum ab ipsa (luce) derivantur omnes formae, per quas res habent, quod cognoscantur.
- (43) *De Trinitate*, Prooem, q. 1, a. 3: 及び *De Veri.*, q. 1, a. 1, c; *De Anima*, q. 5 及び ad 6 参照。
- (44) *S. contra gen.*, L. 2, c. 79, n. 1598. Anima autem est quaedam substantia intellectualis. 参照。
- (45) *Ibid.*, L. 2, c. 78, n. 1589. ...intellectus agens...est aliquid animae humanae.
- (46) *Ibid.*, L. 2, c. 79, n. 1605. ...anima humana, cuius lumen est intellectus agens.
- (47) *De Veri.*, q. 19, a. 1, c.
- (48) *S. T.*, II-II, q. 175, a. 5, c. Et hoc autem quod anima corpori unitur tanquam naturalis forma ipsius, convenit animae naturalis habitudo ad hoc quod per conversionem ad phantasmata intelligat.
- (49) 「形相の輝き」についての詳細は、拙稿「トマス・アクィナスにおける美と善の関係について」(『美学』第14巻第4号1964年美学会編 pp. 20~21)にある。
- (50) *S. contragen.*, L. 1, c. 22, n. 208. (51) *Ibid.*, L. 1, c. 38, n. 313.
- (52) *De Spiri., creaturis*, 11. (53) *Quodlibet.*, II, q. 2, a. 3, ad 2.
- (54) *S. T.*, I, q. 3, a. 4, c. (55) *Ibid.*, I, q. 5, a. 1, c.
- (56) *Ibid.*, I, q. 54, a. 1, c. (57) *De potentia*, q. 7, a. 2, ad 9.
- (58) *De causis*, 6, n. 168. illud *per quod* aliquid cognoscitur, per similitudinem dici potest *lumen*. Probat autem Philosophus (Aristoteles) in IX *Met.* (9, 1051a 29~32) quod unumquodque cognoscitur *per id quod est in actu* et ideo *ipsa actualitas rei est quoddam lumen ipsius*.
- (59) *In Senten.*, I, d. 19, 5, 1. veritas fundatur in esse rei magis quam in ipsa quidditate...ipsum esse rei est causa veritatis, secundum quod est in cognitione intellectus.
- (60) この点に関しては註(49)前掲書拙稿 pp. 13~24を参照。
- (61) 拙稿「トマス・アクィナスの美論」(『美学史研究叢書』第2輯 pp. 43~66. 1971年東京大学美学研究室)参照。